資 料

1890年に官立産婆学校が設置されるまでの 東京における産婆教育

Midwife education in Tokyo before government establishment of a midwife school in 1890

小山田 信 子 (Nobuko OYAMADA) *1

抄 録

目 的

現在の助産師教育を理解するために、日本における助産師教育の発達経緯について明らかにする。今回は、1890年官立産婆養成所成立の背景として、東京における産婆教育について教育施設、教育担当者、教育内容について明らかにする。

方 法

東京府病院産婆教授所における産婆教育開始後東京における産婆養成所について、東京公文書館所蔵文書、医学系雑誌、官報、当時の新聞を手掛かりに史料を発掘し解明する。

結 果

東京における1890年までの産婆養成機関として9つの養成機関が確認できた。教育を担ったのは医学士、東京大学別課卒業医師、内務省免許産婆たちであった。修学期間は1年半のところがほとんどだったが、修学時間数でみると400時間から1200時間の間で開きがあった。具体的教育課程においても重きを置く分野が、基礎医学、産婆学の異常編、産婆学とさまざまであった。そのため、多様な産婆が教育され、濱田玄達の問題意識につながったと考えられた。東京産婆学校(紅杏塾)と官立産婆養成所を比較すると総教育時間数は同等であった。ただ時間のかけ方が異なっていた。官立産婆養成所では実地を重んじ、教育時間の半分を演習実地に充てていた。東京産婆学校では実地演習に充てた時間は総時間の1割程度のみであり、8割を講義にあて、しかも医学と産婆学の比率は50%ずつであった。

結 論

実地を重んじるのか座学を重視するのか、産婆の役割をどのように考えるかによってカリキュラムが異なる。今後、教育を担った医師や産婆の著述から産婆教育内容を検討し、今後の助産師教育を充実させる一助としたい。

キーワード: 産婆教育, 医学士, 内務省免許産婆, カリキュラム, 明治時代

* 東北大学大学院医学系研究科 (Course of Nursing Tohoku University Graduate School of Medicine)

2015年7月1日受付 2015年12月11日採用

Abstract

Purpose

We examined historic processes related to nurse midwife education in Japan to elucidate current nurse midwife education. As background of the government establishment midwife training school establishment, we examined the contemporary state of educational facilities, teachers, and education contents.

Method

To elucidate aspects of midwife education that started at the Tokyo Municipal Hospital Midwife Training School, a midwife training school in Tokyo, the authors examined Tokyo Archive Building documents, medical journals, official daily gazettes, and newspapers.

Results

Results show that, by 1890, nine training organizations were operating in Tokyo. For a Bachelor of Medicine, physicians were required to graduate from another section. The Department of the Interior licensed midwives after they received education.

Training schools commonly enrolled students for 1.5-year courses, but examination of the total course hours showed vast differences of 400-1,200 hr. Fields emphasized in the actual curriculum varied, variously emphasizing experimental medicine, abnormality of midwife studies, and midwife studies. Various midwives were so educated, provoking the criticisms voiced by Hamada.

The total number of hours was equivalent when we compared the government establishment midwife training school with the Tokyo midwife school. The time distribution differed. Practical education is respected in the government establishment midwife school, and that assigned half of the total education time to practical education. Whereas a lecture is made much of in the Tokyo midwife school, that awarded 10% of the degree to the total time for practical education and 80% for lectures. Regarding the lectures themselves, the medicine and midwife study components were about evenly divided.

Conclusions

It is different in a curriculum what you make much of. Curricula differ in terms of their characterization of the role of the midwife. Future studies will examine midwife education contents based on descriptions by physicians and midwives who underwent education. We want to make use of this results of research for nurse midwife education.

Key words: midwife education, midwife role, Bachelor of Medicine, Department of the Interior licensed midwife, curriculum, the Meiji era

1. はじめに

人にとって出自が明らかなことが自己存在の核となるように、学問においてもその教育・制度の発生・成立過程を明確にすることは当該学問を発展させる礎となると考える。

現在日本において助産師になるには看護の勉強をし、さらに2年かけて学ぶ大学院、1年間の大学専攻科・大学別科・専修学校(定時制は2年間)、4年制大学の中の選択科目として履修するコースがある。看護を学ぶコースが複線化している上に助産師教育コースがさらに複数存在している。学校の果たすべき役割と設置主体が意図する教育目的があり、様々な特徴のある助産師が育てられている。医師になるための道筋とはだいぶ異なっている。そのスタート時点で専門職として備えている質が多様であるということとはどのような意味を持つのだろうか。そもそも日本では助産師にどのよう

な役割を期待して教育が始まったのだろうか。

看護職教育の歴史の変遷について看護学のテキストを見ると、看護職の中では産婆教育が先行し、1868年(明治元年)の「産婆ノ売薬世話及墮胎等ノ取締方」及び1874年の医制の中の産婆に関する規定と、東京府病院産婆教授所における産婆教育が取り上げられている(グレッグ・池西, 2009, pp.42-78)。政府は1870年にドイツ医学を導入し、「医制」を制定した。これを受け東京府では東京府病院産婆教授所において従来産婆営業者の教育と内務省免状産婆の教育を開始し、教科書としてBernhard Sigmund Schultzeの「Hebammenkunst」を訳した「朱氏産婆論」が用いられた。このテキストが東京府から国の省庁府県長官等に寄贈され全国に伝搬し、大阪京都その他の地域で実情にあわせた産婆教育が始まった事が明らかになっている(高橋, 1990, pp.39-51)。1880年には櫻井郁二郎(以下櫻井とする)が東京に紅杏塾を開きこれが私立産婆養成の嚆

矢として知られている(杉田, 1996, pp125-151)。櫻井は東京医学校(1877東京大学医学部となる)を1876年に卒業し, 1877年東京大学助教, 1881年助教授になり1886年3月に辞職するまで東京大学で診療・医学教育を行っていた(柳井, 1941)。

当時の産婆教育はドイツ医学に基づいたものであるが, ドイツから戻った濱田玄達(以下濱田とする)は, 新産婆といわれる産婆も産床の取扱を知り実行している者はほとんどいないとし「其方針ヲ誤ル者, 産科医ト産婆トノ差別ヲ混淆シ産婆ニ教ルニ産科学ヲ以テスル者アリ」等の問題をあげている。軌道を修正した誤りのない日本の産婆教育を行うのは大学において他には望めないとして, 帝国医科大学内に産婆養成所を開設する提案を行い(濱田, 1890, pp.615-617), 1890年官立の産婆養成所が設置された(官報, 1890, 2063号 pp.224-225)。

櫻井は1870年大学東校(東京医学校の前身)に入学し, 1871年来日したドイツ軍医ミュレルのドイツ語原語による講義を受け, 数々の厳しい選抜試験をパスして1876年に卒業した25名の一人である。朱氏産婆論を訳した山崎玄脩は櫻井の同期生である(東京帝国大学, 1932, pp.431-433)。一方濱田は1871年10月大学東校に入学し1880年7月東京大学医学部を卒業し医学士となった。卒業と同時に熊本医学校に就職し1884年私費でドイツ留学している(佐伯, 1934, pp.505-525)。濱田がドイツで見聞した産婆教育とドイツ医学を基にした東京府病院や紅杏塾での産婆教育に乖離があったのだろうか。濱田が危機感を覚えた産婆教育とはどのようなものだったのだろうか。東京府病院や紅杏塾のほかにもどのような産婆教育機関が存在し, 教育を担ったのは誰なのだろうか。今回は官立産婆養成所設置に至る背景として, 東京における産婆教育について, 当時の新聞や医学雑誌, 公文書を手掛かりに解明を試みる。

II. 方 法

明治期の東京における産婆養成機関を把握するため, 東京公文書館, 国立公文書館, 国立国会図書館保有の史料の発掘調査を行った。東京府病院における産婆養成から1890年官立養成所設置までをカバーする史料を検出するため, 綴り紛れなど保管資料の期限の妥当性の安全圏を考慮し, かつ, 入手可能な1876年から1894年までの以下の史料を閲覧・確認し, 該当史料を抽出した。史料から産婆養成に関する文書, 記事を抽出し整理分析を行った。教育課程表が残されていた養成機関については, 科目と時間数を算出し比較を行った。

史料: ・東京府公文書(1876年～1894年)・官報(1883年～1890年)・医事新聞(1878年～1883年)・東京医事新誌(1877年～1891年)・中外医事新報(1880年～1891年)・明治期の読売新聞東京版・明治期の朝日新聞東京版

III. 倫理的配慮

すべて公開の史料を用いた。公文書の閲覧・活用については東京都公文書館の許可を得た。個人名の記事についても場合によっては伏せ字にするなどの配慮が必要な事を意識して扱った。

IV. 結果・考察

東京府病院産婆教授所から1890年東京大学医科大学第一医院産科教室産婆養成所設置までの間に東京に存在した産婆教育機関について史料を発掘した結果9つの養成機関が確認できた(表1)。既にテキストでも知られている東京府病院産婆教授所と紅杏塾について

表1 明治23年(1890年)までの東京における産婆養成機関と教員

No.	年	施設長・教員	養成所名
1	明治9(1876)	長谷川泰・原桂仙	東京府病院産婆教授所
2	明治13(1880)	櫻井郁二郎・産婆	紅杏塾(明治16年東京産婆学校)
3	明治19(1886)	木庭 栄	不明(医術開業並びに産婆教授)
4	明治20(1887)	内河いく・小倉規矩・浦嶋堅吉	東京府病院産婆教授所
5	明治21(1888)	大田松郎・医師・産婆	産婆学校
6	明治21(1888)	瀧野サエ・戸田つね子	芝産婆学校
7	明治21(1888)	村松志ほ子	私立芝産婆学校 安生堂
8	明治22(1889)	水原 漸・医師・産婆	私立産婆夜学校
9	明治23(1890)	石井亀次郎・石井えき	私立産婆学校

得られた史料から知見をのべ、次に発掘により得られた7つの養成機関についてのべる。最後に入手できた教育課程表からその内容を分析し比較検討を行う。

1. 東京府病院産婆教授所と紅杏塾の教育

1) 東京府病院産婆教授所

東京府病院は東京府の庶民の救済病院として1873年に設立され人々の疾病の治療、貧民の施療、府下の学費乏しい医学生教育、産婆の教導を担った。1879年4月時点で医学卒業者は87名、1878年5月以来産婆生卒業者は19名であった(医事新聞、12号、pp.16-17)。東京は他地方に比べて医師の数が多かったこともあり、区医制度など貧困者の救済制度が一般開業医の反感を招いた(東京医事新誌、59号、pp.16-20)。また西南戦争の影響による財政悪化もあり、産婆養成は1880年度限りとなり翌年7月東京府病院は全く閉鎖された(東京医事新誌、166号、p.28)。

1876年11月17日付長谷川泰の東京府知事宛て上申書(東京都公文書608.C8.01, p.66)から「乙号、今般当府病院ニ於テ年齢二十歳以上三十歳以下ノ婦人三十名通学ヲ許ス産婆師範志願ノ者ハ来ル明治十年二月十五日迄ニ当府病院江願出可シ」とあり、長谷川は、産婆師範を養成する意図で産婆教授所を設置したことがわかった。当時はお産をめぐる母子の死亡が多かったため、分娩に直接かかわる産婆の教育が喫緊の課題とされていた。では実際に産婆の教育にあたったのは誰であろうか。長谷川院長の名はあるものの(杉田、1996)詳細は不明である。東京医事新誌260号1883年3月24日に「産婆学校 櫻井郁二郎氏は兼て府立産婆教場の教頭をも勤められ……」とある。櫻井の履歴書(柳井、1941, pp.7-31)を確認したが、東京府病院の所属は認められなかった。また、東京公文書の病院医員一覧(東京公文書608.C8.01, p.5)にも櫻井の名前は確認できなかった。請われて医学部所属のまま教えた可能性は否定できないが、東京府病院の正式職員として教授所での産婆教育を担ったとは考えられない。1876年10月18日付長谷川の東京府知事への伺い文書中以下の文が確認できた。「甲百六十五号 教授医員之儀ハ非役陸軍軍医原桂仙御採用相成度右ハ独乙国ボン府大学ニ於テ産科博士フワイト氏ニ親炙シ一通リ學術共研究致シ候條此段相伺候也」とあり、長谷川は産婆教授として陸軍軍医の原桂仙を考えていた。

原桂仙については石黒忠眞の記述(1889, pp.153-155)から知ることができる。原は信州出身で松本良順、

佐藤尚中に学び1870年8月ドイツに留学する。ボン大学で婦人科産科を学び1874年6月帰国8月陸軍軍医となる。1879年10月病により軍医を退き東京で婦人科産科を開業、胃病を患い1889年49歳で逝去する。東京府病院で産婆教育にあたったのは原桂仙であった。濱田に先行しドイツで産科婦人科学を研鑽し、その見聞や経験をもとに産婆教育にあたったものと考えられる。山崎玄脩が訳したシュルツ産婆論をテキストとして、教員としては原桂仙、他に東京府病院の雇医の山崎玄脩、橋本信助が教育を担った。

2) 紅杏塾

テキストに良く引用される明治初期の私立の産婆養成所である。「櫻井郁二郎伝」によると、紅杏塾は1880年5月に開校したと明記されている。紅杏塾では教員には医師と産婆を1名ずつあてていた。1883年東京産婆学校と改称し、その設置目的は、「産婆は目下地方の需め多く、之を陶冶する学校なきが故に専ら産婆を養成し、且普通産婆の師範となる学力を与ふるに在り」としている。産婆と産婆の教育ができる産婆を養成することを教育のねらいとしていた。これは東京府病院の目的に重なる。紅杏塾設立には1881年に東京府病院での産婆教育が廃止されたことも影響していると考えられる。また、櫻井は産婆の質の向上を願い時の衛生課長、同業の中井常二郎、山崎玄脩とともに東京産婆会をおこした。

2. 1890年(明治23年)までの東京における産婆養成所とその教員

1) 木庭栄の産婆学校(1886, 11月9日, 読売新聞, p.4)

木庭栄については、元千葉県甲種医学校教諭兼附属病院医局長としての投稿(長尾、1932)が手掛かりになる。木庭は東京大学別課医学部卒業生で(東京大学医学部、1884, p.259)卒業と同時に千葉医学校に赴任し1886年秋辞職、その後東京で開業し産婆教育に従事した。東京産婆会の運営にも協力したことが先の櫻井郁二郎伝からもわかる。木庭が大学別課卒業であることから、時期的に櫻井から産科学の教授を受けていたことになる。櫻井の産婆教育に対する姿勢が影響した可能性が推測されるが、新聞広告にある情報以外詳細は不明である。

2) 産婆学校(内河いく)

教員は医学士1人と内務省免許産婆が2名で、産婆が校長である。産婆学校設置願(東京都公文書、616.C8.03)から、設置の目的は「一設置ノ目的：本校ハ産

婆学ヲ教授シ専ラ成規ノ開業試験ニ応スヘキ産婆ヲ養成スヘキモノトス」であった。産婆開業試験に合格することを目的にしていた。校長の内河いくはその履歴書（東京都公文書，616.C8.03）より，1883年6月から大学医学部産科婦人科看病婦をしながら清水郁太郎，浦島堅吉，榊順次郎から産婆学及産婆術の教育をうけ，1885年11月産婆営業免許状を下付されていた。清水郁太郎は東京大学医学部の1回生であり，初代の東京大学産婦人科教授である。産婆養成所設置の必要性を進言したものの実現しなかったといわれていたが，実質産婆の教育は行われていたことが明確になった。産婆教員の小倉規矩は1883年1月より翌年2月まで芝区愛宕下町の産婆齊丸ミチ（内務省免許番号22）（横井，1882）について産婆術修業している。

3）芝産婆学校

1888年5月28日付設置願（東京都公文書，617.D3.22, p.12）によると，芝産婆学校は実地に適切な方法で産婆学の範囲のものを追及し，完全なる産婆を養成することを目的としている。教員は教師1名で大田が担当し助教に医師又は産婆1名をあてるとしている。

大田松郎は福岡県出身で1880年5月に東京大学別課を卒業している。卒業後は大学医学部医員，1881年6月から熊本県公立八代病院長，1884年2月から青森県公立田名部病院長を経て1885年3月東京府芝区で開業，1886年12月芝区医に任命されている。大田松郎以外の教員は現時点で不明である。

4）私立麹町産婆学校

設置目的は正規の開業試験に合格するように教育をする，となっている（東京都公文書，617.A6.11, p.337）。校長兼教員は瀧野サエ，教員は戸田ツネである。履歴書によると戸田は1881年8月から原桂仙より産科実地の教授を受け，1885年9月より瀧野サエに師事し産婆学を学び1888年6月に内務省産婆免許を取得する。産婆学校開設申請が1888年7月17日となっており，戸田ツネは免許とりたての状況で教員になったということになる。

瀧野サエは旧姓戸田で，内務省免許番号47の産婆である（横井，1882）。履歴書によると1876年2月より麹町区医師原桂仙に産科手術を，山崎玄修に学科を，橋爪助信に実地の教えを受け（東京都公文書，617.A6.11, p.341），1880年6月卒業，9月内務省免許産婆となっていた。東京府病院産婆教授所の卒業生である瀧野サエは，「産婆の師範を育てる」という養成所の教育目的を体现していたことになる。

5）私立芝産婆学校 安生堂

村松志保子は1854年に生まれ，沼田藩の典医である父に医学を学び，針術をおさめる。産婆学の必要を感じ，済生学舎と櫻井学校および東京府産婆養成所で学び1881年卒業，本所横網町で産婆業を開業する（鈴木，1892, pp.83-85）。1885年東京産婆会の第六支部会長となり本部の幹事にも選出され，1889年には産婆学校を設立している。当時の新聞に産婆生徒募集の広告が確認できた（1889，9月22日，読売新聞，p.4）。産婆学校は予科と本科があり，予科では1週2時間産婆学に須要なる理理解剖生理薬剤の大意，本科は1週5時間，妊娠の鑑別，順産不順産の処置，妊婦産婦褥婦及び嬰兒の摂護法，臨床講義となっていた。そして，「方今産婆学を修むる生徒普通教育に乏しくして妄に速成を期する弊あり故に以上課程の他淑女館に於て別に月謝を要せず英学並に普通学を教授す」とあり，産婆学だけでなくその土台となる基礎教育も行っていたことが明らかになった。また，恵まれない妊産婦に対する対応が人々の共感をよび，露国皇太子からの寄付等寄贈を受けた（1891，3月26日，朝日新聞，p.3）。

淑女館は村松創設の女学校である。教師は英国の女教師一名と内国女子数名にて，別科として産婆学を教え，両校通じて月謝は一円とある（1889，5月23日，読売新聞，p.2）。産院には医師も雇用していたため産院のスタッフが教育を担当したと思われる。助産婦の歴史として村松志保子に関する連載があり，ここでは淑女館の教員の氏名が明らかになっている（石原，2007, pp.333-335）。しかし産婆学校の教員名は志保子以外には医師の武田敬治の名前があるのみで詳細は不明であり，関連史料の発掘が待たれる。

6）私立産婆夜学校

水原漸は1861年生まれ1886年5月に医学部別課を卒業し内務省医術開業免許を受けている（東京都公文書，620.B7.01, p.202）。1893年3月より医科大学撰科生となり産科婦人科の研究に従事し，1889年私立産婆夜学校を設立する。東京都公文書館所蔵文書（東京都公文書，621.A6.04, pp.127-129）からその設立目的をみると，「本校ハ専ラ昼間就学之能ハサル女子ノ為ノ産婆学ヲ教授シ並ニ産場ニ就キ実地ヲ研究セシム」とあり，昼間就学できない産婆希望者のために夜間の学校を設けていた。家業・家事の役割を避けられない当時の女性の立場を考えれば，夜間の学校の存在は本当に産婆になりたい女性のための学校として貴重だったろう。水原漸の回想記事がある（1940，10月31日，読売新聞，p.4）。

「昔の産婆といへばただ出てくるものを受け取りお湯を使わせるだけのものでしたよ。消毒の知識などむろんなく、ボロや浅草紙を揉んで産後の始末をしようと云った風でした。当時医者が外国に研究にいても産室の中へ入れて見学するのをどうしても許さなかった。それでお産に必要な知識はあっても、実際の経験のある医者は一人もいなかった。当時の生徒は今のようには廿歳前後の若い者は殆どなく、夫に死別し子どもを女手に抱えて生活のために何か職業につかねばならぬといふ四十歳にもなる女性が多かったのです。」

1940年時点での回想であり、客観的事実というよりは印象に残っている事象が誇張されている可能性はあるが、当時の事情を知る上で貴重である。水原産婆学校の生徒は40歳前後の女性が多かったというが、お産に対する風習から産婆役割を果たすのはある程度年齢の高い女性が抵抗がなかったものと推察される。知識・権威があっても男性である医師はお産の現場にはなかなか立ち会えなかったという。当時の人々は、お産で異常になったり病気の場合にこそ医師を頼りにするものの、通常お産は医療とは無関係と受け止めていたということであろう。1884年時点で、東京大学では市中の産婦へ医学部産科医員の往診を始めていた(中外医事新報第113号, 1884, pp.25-26)。正常のお産の経過の実際をみることにしに異常の対処は困難であったろう。往診を無料にしてまでも立ち会う必要があったのである(醫海時報第152号, 1897, p.325)。産婆だけでなく医学士教育においてもお産の現場は貴重だった。

7) 私立産婆学校(石井亀次郎)

校長が医学士石井亀次郎、副校長石井えき、産婆生30名募集広告(1890, 9月26日, 朝日新聞, p.4)が出されていた。石井亀次郎は正規の就学経緯であれば予科を3年履修し1883年から本科生として学んだことになる。官費留学の清水郁太郎がドイツから帰国し医学部本科生に産科婦人科学の教育を始めた時期に重なる。お雇い外国人で占められている医学部教授ポストに日本人として初めて清水が就任した。東京大学だけでなく国を挙げての期待だったろうと推察する。清水はそれまで仮住まいだった産婦人科教場、産婦人科病室を独立させ、妊婦の入院を許可し産室での分娩実習の機会を作った。また、往診の課を設け産科医員の往診時学生を随行させるなど、実地に接する機会を設けた(小川, 1967, pp.410-413)。清水はその後産婆教育課の設置も考えていたようであったが、1884年12月に肺

労を発症し翌年2月に夭逝、産科婦人科は再びベルツが兼任した。産科婦人科学と産婆養成への意欲ある若い教授の教育を石井亀次郎は受けたのである。清水の熱い思いが石井亀次郎の産婆養成事業への誘因となった可能性がある。

以上、1890年までの東京における産婆教育機関について、東京都公文書館史料および新聞、医学雑誌等から合わせて9施設抽出できた。原桂仙はドイツボン大学で婦人科産科を学んだ軍医であり、櫻井郁二郎、浦島堅吉、石井亀次郎は医学士であった。櫻井は1881年から1885年まで別課医学生に産科婦人科学を教授しており、大田松郎、木庭栄、水原漸は東京大学医学部別課を卒業していた。内河郁、小倉規矩、瀧野サエ、戸田つね子、村松しほ子、石井えきは内務省免許産婆である。9機関中7か所で医師とともに内務省免許産婆が産婆の教育を担っていた。学習者のニーズから夜間コースも創設されていた。

3. 1890年までの産婆学校における教育内容

濱田が危機感を覚えた当時の産婆教育について、養成所の就学期間、入学要件や教育課程等から検討する。東京都公文書から東京府病院産婆教授所、芝産婆学校(大田松郎)、産婆学校(内河郁)、柳井の「櫻井郁二郎先生伝」から東京産婆学校(前身は紅杏塾)、官報より帝国大学医科大学第一医院産科学教室産婆養成所について分析する。

9つの養成機関中、記載のなかった3機関以外、修学年限は5校は全て1年半であり、1期を半年として3期にわけ、1日2時間～6時間の講義であった(表2)。定員は15名から60名の範囲で、入学要件として15歳以上、普通仮名交じり文章を解し得べき者とするところや、小学校全科卒業の要件を提示しているところもあった。女子に学問は不要という観念の時代にあり、女子小学校就学率は20～30%であり、小学校全課程卒業というのは相当な高学歴だったといえる。

具体的教育課程が入手できた芝産婆学校と産婆学校の教育内容についてみる。

1) 芝産婆学校

学科課程表(東京都公文書, 617.D3.22, p.17)をみる(表3)。起業終業時間の史料(東京都公文書, 617.D3.22, p.14)より1日6時間授業であり、特徴として全期に実地が組み込まれている事、異常産の比率が高い事があげられる。

カリキュラムは予備学、平常産学、異常産学、実地

表2 産婆養成所

養成所名称	修業年限	授業時間	入学資格	定員	月謝	教育目的
東京府病院 産婆教授所	1年半 3期	毎日 2～3時間	20歳以上30歳以下 普通ノ文章ノ読法並ニ 書法ニ差支ナキ者撰テ 入学セシム	30～50名		産婆師範を養成する
(紅杏塾) 東京産婆学校	(2年) 18か月 3期 1期修業の日数72日 (72/3=24W=6M)	火木土 一日2時間 15時～17時	入学随意 和漢の書を 読み口述筆記差支えな きを要す	(十余名) 30名	70銭/月	産婆は地方の需め多く之を陶冶する 学校無きが故に専ら産婆を育成し且 つ普通産婆の師範となる学力を与ふ
産婆学校	18か月 3期	1日3時間	入学試験ヲ行フ寄宿舎 ナシ普通仮名交リ文章 ヲ解シ得ベキ者 15 歳以上	50名	50銭/月 束修50銭	本校は産婆学を教授し専ら成規の開 業試験に應ずべき産婆を養成すべき ものとす
芝産婆学校	1年半 3期	1日6時間	小学校全科卒業以上ノ 者16歳以上ノ婦人ニ 限ル寄宿舎無	60名	75銭/月 校舎費10銭 束修1円	産婆必要の学理を教授し兼て実地を 練習せしめ専ら高尚の産婆を養成せ んとす
私立麹町産婆学 校	18か月 3期	1日4時間	15歳以上50歳以下	50名 入塾25人	50銭 束修50銭	本校は産婆学を教授し専ら成規の開 業試験に應ずべき産婆を養成すべき ものとす
私立芝産婆学校 安生堂	10か月				50銭/月 普通学兼修者1円/月 束修1円	学科は産婆に須要なる学を教授し、 又生徒の望により英学、漢学其他の 普通学をも学ばしめ、完全の産婆を 養成する所なり
医科大学第一医 院 産科学教室産婆 養成所	10か月 2学期	1期：1日 1～2時間 2期：1日 2時間	体格強壯品行端正25 歳以上家事ニ関係ナキ 者眞片仮名文ヲ解シ得 ル者		50銭/月	実地に慣れたる常識ある道徳堅固の 産婆を養成する

表3 教育課程表比較1

1期=6ヵ月

芝産婆学校 学科	時間	1期	2期	3期
予備学		解剖大略	生理大略	妊婦ノ生理
平常産学	毎週6時間	妊娠経過ノ論	胎児位置ノ論 妊娠ノ診断法	順産並産褥ノ論
異常産学	毎週6時間	妊娠経過異常ノ論	分娩経過異常ノ論	産褥異常ノ論
産婆職務心得	毎週6時間	産婆心得	器械用法	実施
実地演習	毎週6時間	実地	実地	
起業終業時間：午前8時就業正午12時休息 午後1時就業同3時終業(1日6時間)				
産婆学校 学科	時間	1期	2期	3期
解剖	毎週6時間	解剖摘要 骨学・筋学・靱帯学	解剖摘要 消化器呼吸器血管神経五管	
生理	毎週6時間	人身生理学 上巻	人身生理学 中巻	人身生理学 下巻
産婆学	毎週6時間	産婆学 誘導編 正規ノ妊娠分娩産褥ノ経 過論	産婆学 妊娠分娩産褥ノ異常	産婆学 妊婦褥婦婦人的ノ疾病及 ヒ初生児ノ疾病論
実地	毎週6時間			妊婦産婦褥婦ニ付 実地演習

一日3時間授業

の4種類に大別でき、科目構成内容は朱氏産婆論に準じていることが明確である。設立趣旨は「完全ナル産婆ヲ養成シ実地就業ニ當リ挙事応用ナラシメント欲ス」である。実地で応用できることに重きを置いている。分娩は、無事に産まれて自然分娩と結論されるその経過中にも幾度となく異常に移行する危険と隣あわせである。ここでは、妊娠分娩産褥の異常編が平常産編の約2倍に設定されている。当時は正常のお産に医

師は関係しないことが多かった(櫻井, 1882, pp.6-15)。医師は異常産の対処については医学の理論と実体験による知識技術があり自信を持って教えていたに違いない。医師としては熟知の異常産にウェイトのある産婆教育課程であることが推察でき、濱田の問題意識の誘因になった可能性が考えられた。

2) 産婆学校

解剖生理産婆学をそれぞれ毎週6時間とあり、月曜

から土曜まで毎日1時間ずつあわせて3時間の授業が行われることが読み取れる。1期は解剖・生理・産婆学(正常編)を毎日1時間ずつ、2期になり解剖・生理・産婆学(異常編)、3期で生理・産婆学(異常編)・実地演習が1時間ずつの構成である(東京都公文書, 616.C8.03, p.50)。全体の過半数を解剖生理学が占めている事(56%), 産婆学の中でも異常編の占める割合が高い事がこの教育課程の特徴と解釈できる。解剖・生理学の基礎的知識は確かに重要であるが、総時間に占める割合から、濱田の問題意識を招いた可能性がある。この養成所の設立趣旨は「専ら成規ノ開業試験ニ応スヘキ産婆ヲ養成」とある(東京都公文書, 616.C8.03, pp.42-46)。内務省試験に合格することが目標になっている。普通仮名交じり文章を理解できる者という入学要件だけで、基礎となる医学的専門知識がどのぐらい理解できたのだろう。解剖・生理学の占める割合が大きい背景にはそのようなことも影響していた可能性が考えられる。

3) 東京産婆学校と医科大学第一医院産科学教室の教育課程表

東京産婆学校と医科大学第一医院産科学教室の教育課程を比較する(表4)。

東京産婆学校は修学期間としては1年半であるが、1

日2時間1週間に6時間で火、木、土の午後3時より5時までとなっていた(柳井, 1941, pp.34-49)。1か月を4週として科目の合計時間を算出したところ、合計で432時間であった。一方医科大学第一医院は10ヵ月で2学期になっている。第一学期は解剖生理が1週間に3時間、産婆学が妊娠分娩産褥の平常経過と異常経過を含めて1週6時間、第2学期は産科模型演習1週12時間となっていた。同様に1か月を4週として履修時間を算出すると、解剖生理は60時間、異常含めた産婆学が120時間、演習240時間となり合計420時間であった。修学期間をみれば差があるものの、総授業時間数をみると東京産婆学校と第一医院附属産婆学校はほぼ同等であった。両者とも東京大学医学部で産科婦人科の診療を行いつつ医学生の実践教育を実践する医学士である。分娩を扱うために必要な基本的知識構成内容等共通していた事と推察する。産婆に何を求めるか、産婆は何をする人と考えるかによりカリキュラム構成に違いが表れたと解釈できよう。

4) 4校の教育課程の比較

教育課程表をもとに、1か月4週として内河の産婆学校、大田の芝産婆学校の授業時間を算出する。総時間がともに1296時間になり、櫻井や濱田の主宰する産婆学校の3倍もの時間をかけていたことが明確になった。

表4 教育課程表比較2

東京産婆学校(明治16年)				1期=6ヵ月
時間	1期	2期	3期	
毎週6時間	全身解剖 生理学	3時間 3時間		
毎週6時間		局所解剖生理学 産婆学誘導論 妊娠分娩産褥生理 妊娠分娩産褥処置法	1.5時間 1.5時間 1.5時間 1.5時間	
毎週6時間			異常妊娠分娩産褥論 実地及ヒ模型演習 初生児処置 同人工栄養法	1.5時間 1.5時間 1.5時間 1.5時間
医科大学第一医院産科				櫻井郁二郎先生伝 p41-49 より作成 1期=5ヵ月
時間	1期	2期		
毎週3時間	解剖生理ノ大意			
毎週6時間	産婆学	模型演習		
	産婆学	模型演習		
毎週6時間		模型演習		5ヵ月=20週とする 解剖生理: 3×20=60 産婆学: 6×20=120h 模型演習: 12×20=240h
		模型演習		

表5 履修時間の比較

産婆学校	櫻井 東京産婆学校	内河 産婆学校	大田 芝産婆学校	濱田 第一医院
修業期間	1年半	1年半	1年半	10ヵ月
解剖・生理	180	720	216	60
産婆学	180	144	360	120
異常編	36	288	432	
演習・実地	36	144	288	240
合計時間	432	1296	1296	420

た(表5)。

次に、各学校の教育時間全体に占める科目の割合をみる。4校中、産婆学校では解剖生理の占める割合(56%)が突出している。総時間1296時間の1/2以上が解剖生理であり、全体の8割以上を産婆学以外の教科が占めていた。当時女子の小学校就学率は男子の1/2程度であり(文部省教育調査部, 1937年), 専門的知識を理解するための基礎知識の修得も危うい状況にあった。専門的知識の理解には確かに時間を要したであろうが、産婆学にあてる時間が144時間で全体の10%程度である。産婆学をどのように解するか、どのような産婆を育てたいのかが鍵になる。

従来日本において産婆は産婦の身の回りの世話と産まれた子の沐浴が務め、と産婆も医師も一般の人々も考えていた(櫻井, 1882, pp.6-15)。分娩の生理をふまえた異常の回避や対応ができず、産婦と新生児の命を守れない状況があっただろう。だからこそ、専門的知識を備えた産婆の存在が必要であると教育者は切望したが、産婆にどこまで何を期待するのか、に差があったと考える。

4校中第一医院は演習実地の比率が全体の67%と突出している。座学は総時間の半分に満たず産事実地取扱法に重きを置いている。教育総時間としては同等の東京産婆学校が演習実地時間が8%であることとは対照的である。芝産婆学校は総授業時間は多いものの、構成科目の時間配分はほぼ均等である。また解剖生理と異常を合わせた医学的基礎にあたる時間と産婆学の時間が同等であった。芝産婆学校の設立目的は完全なる産婆の養成である。どのような状況にも動くことなく応用のきく産婆を願い、必要な学理と異常編と実地に時間をかけて高尚な産婆を養成したいと考えていた。1887年全国の医師40343人中大学卒業は1041人(2.6%), 産婆29863人中内務省免許産婆は338人(1.3%)である(厚生省医務局, 1976年, pp.572-573)。地方など医師の少ない土地では切実に優秀な産婆が必

要とされる状況であった。大田は開業前は熊本、青森に赴任していた。東京に比べ医師も産婆も少ない地域である。異常も含めお産は産婆が対応せざるを得ない状況を肌で感じていたと推察できる。地方の実情をみた経験から完全な産婆を養成するという目標が出されたことが推測される。

第一医院での産婆教育ではどのような産婆を期待していたのだろう。濱田は、産婆がすべきことはお産の経過が正常か否かを見つめるために注意深く産婦を観察する事としていた(濱田, 1891年)。産婆は異常を取扱う役割ではなく、いささかたりとも異常を認めた場合速やかに医師を招き医師の指示に従うもの、と考えていた。朱氏産婆論では、「異常が起こりつつある時は自分が対処可能かどうか鑑別しつつ救う術を行わないではいけない。産婆の技術が及ばない異常は医師を招き産婆は医師の指示に従う」とある。朱氏産婆論では産婆が対処できる異常には術を行うとしている。この対応が濱田と大きく異なる(小山田, 2012)。

東京産婆学校では解剖生理と産婆学の講義時間数が等しく、そしてこれらを合わせた時間が全体の8割を超えていた。産婆学を解剖生理と同じだけ時間をかけることは、産婆学を、医学の専門的知識を土台に専門に学ぶ必要のある学問と解している事の現れと考えられる。産婆学として教授する内容が充実していた証とも考えられる。普通のお産の場にあつて熟練の産婆の手に負えない時やそのような産婆を助けることが医師の本分である(櫻井, 1879, pp.8-14)と櫻井は言う。それだけ多くのお産の現場に立ち会い、実際の産婆の行動を櫻井は把握できていたと考えられる。そして「産婆術は妊婦の取扱と分娩を助けることと初生児を取扱う技術の総称であるが、これにとどまらず甚だ広く甚だ重要な役割がある」と、産婆の役割として現状にとどまらず産婆の役割に発展の可能性をみていた。

以上、1890年の第一医院産科学教室産婆養成所開設まで東京における産婆養成機関について述べた。上記学校以外に産婆養成の方法として、内務省免許産婆に個別に師事する学び方があり、それを斡旋する機関も存在し(医事新聞, 98号, p.2), 科目時間の配分等は教える内務省免許産婆の才覚にまかされていた。

以上から、濱田の産婆養成に対する問題意識は、東京府病医産婆教授所や紅杏塾に対する批判というよりは、その後創設された内河や大田が主宰する産婆養成機関を含めた多彩さに対する意見とも受け止めることができた。産婆は何をする人か、この問いこそが教

育に反映される。1890年当時の社会経済状況教育的背景そして教育担当者の立場をふまえた解釈が今後の産婆教育を考える上で重要である。

V. 結 論

東京府病院産婆教授所から始まった産婆養成であるが、1890年までに9か所の産婆養成機関が確認できた。医学士、別課卒業医師、内務省免許産婆たちが教育を担った。修学期間は多くは1年半で、400時間から1200時間の開きがあった。この時点で産婆教育の目的やカリキュラムは多様性があり、教育内容の構成や比率の点で濱田の問題意識に影響する教育機関の存在がうかがえた。産婆をどのように考えて教育するのか、今後は、産婆学校開設者の著述等から産婆の役割に対する考え方を分析するとともに東京以外の地方における産婆教育事情についても確認する必要がある。

文 献

- グレッグ美鈴、池西悦子(2009). 看護教育学(pp.42-78). 東京：南江堂.
- 濱田玄達(1890). 産婆養成所ヲ開クノ意見. 中外医事新報第245号, 615-617.
- 濱田玄達(1891). 産婆学前編, 秋香堂, pp.1-12, 国会図書館.
- 府会地方税議案甲号第九号ノ病院費ヲ論ズ.(1879, 5月10日). 東京医事新誌, 59号, pp.16-20.
- 表彰に輝く半生を捧げた歴史.(1940, 10月31日). 読売新聞, p.4.
- 入澤達吉(2008). 雲荘随筆, 東京大学医学部医学部附属病院創立150周年記念, 草創期の東京大学医学部, pp.289-295.
- 医術開業並に産婆教授広告.(1886, 11月9日). 読売新聞, p.4.
- 石黒忠真(1889). 故陸軍二等軍医正原桂仙君小伝, 中外医事新報第213号, 153-155.
- 石原力(2007). 明治・大正の産婆・村松志保子, 近代の助産婦その253, ペリネイタルケアvol.26(3), 333-335.
- 慈善金(1891, 3月26日). 朝日新聞, p.3.
- 亀山美知子(1993). 新版看護学全書別巻7看護史(pp.93-95). 東京：メヂカルフレンド社.
- 官報 1890年5月19日 2063号 pp.224-225.
- 唐沢信安(1994). 東京府病院長としての長谷川泰, 日本医師学雑誌, 40(1), 1473.
- 来る十月一日より産婆学校授業相始む.(1890, 9月26日). 朝日新聞, p.4.
- 厚生省医務局(1976). 医制百年史資料編, ぎょうせい, pp.572-573.
- 今般官に上申して産科学校を開設し.(1880, 4月24日). 読売新聞, p.4.
- 文部省教育調査部(1937). 義務教育年限延長に関する参考資料, 国会図書館蔵.
- 長尾美和(1932). 長尾精一伝, pp.227-229, 東京：政教出版社, 国会図書館蔵.
- 緒方正清(1915). 明治年間ニ於ケル我邦助産科及婦人科学ノ発達史, 緒方婦人科学紀要, vol7, 239-270.
- 小山田信子(2012). 明治期の産婆テキストにみる産婆の役割, 日本看護歴史学会第26回学術集会講演集, pp.33-34.
- 佐伯理一郎(1934). 濱田玄達先生略伝, 中外医事新報 1214号, 505-525.
- 櫻井郁二郎(1882). 産婆論, 医事新聞第51号, pp.6-15.
- 櫻井郁二郎(1879). 医士産場ニ於ケル主務, 東京医事新誌, vol61, pp.8-14.
- 産婆学校(1883, 3月24日). 東京医事新誌, 260号, p.28.
- 産婆教授(1881, 4月19日). 読売新聞, p.4
- 産婆教授(1882, 5月9日). 読売新聞, p.4
- 産婆生徒及妊婦募集す(1889, 9月22日). 読売新聞, p.4.
- 産婆志願の者に告ぐ(1883, 9月25日). 医事新聞第98号, p2.
- 産婆生徒教授規則(1883, 10月25日). 医事新聞第101号, p32.
- 産科往診(1884). 中外医事新報第113号, 25-26.
- 産科往診(1897, 5月3日). 醫海時報第152号, p.325.
- 杉田暉道(1996). 日本における近代看護, 系統看護学講座別巻9 看護史, 医学書院, pp.125-151.
- 鈴木光次郎(1892). 明治閨秀美譚, 東京堂, pp.83-85.
- 淑女館(1889, 5月23日). 読売新聞, p.2.
- 高橋みや子(1990). 朱氏産婆論の翻訳と府県への寄贈, 千葉大学看護学部紀要, vol12, 39-51.
- 武谷雄二編(1999). 助産学講座1助産学概論(pp.42-51). 東京：医学書院.
- 帝国大学(1887). 帝国大学一覽, p.75.
- 東京大学医学部(1884). 東京大学医学部一覽自十六～至十七, p.259.
- 東京大学, 東京大学医学部一覽從明治16年至明治17年, p.263.
- 東京大学医学部創立百年記念会 小川鼎三(1967). 東京

大学医学部百年史, pp.410-413.
東京府病院(1881, 6月4日). 東京医事新誌, 166号, p.28.
東京府病院紀事(1879, 4月15日), 医事新聞第12号,
pp.16-17.
東京帝国大学(1932). 東京帝国大学五十年史 上冊,
pp.431-433.

山崎玄脩(1877). 朱氏産婆論, 東京府病院編, 東京: 丸
善書店, 国会図書館蔵.
柳井貴三(1941). 櫻井郁二郎先生伝, pp.7-31; pp.34-39,
東京: 柳井貴三, 国会図書館蔵.
横井寛(1882). 全国医師薬舗産婆一覽(内務省免許), 東
京: 英蘭堂, 国会図書館蔵.